

銅像の建つ場についての考察

大坪潤子
OTSUBO Junko
(COE 研究員・RA)

はじめに

銅像のある場所、と聞いて、今日私たちはどのような場を思い浮かべるだろうか。具体的な像の名前や特定の場所がすぐに浮かぶこともあれば、漠然とした場のイメージが浮かぶこともあるだろう。そしておそらく前者は上野公園の「西郷さん」こと西郷隆盛像や皇居前広場の楠木正成像、そして渋谷駅前（広場）の忠犬ハチ公像等が代表格で、後者には前者に見られるような「公園」「広場」といった、いわゆる公共の場所が挙げられるのではないだろうか。

筆者は10年ほど前から、いわゆる「銅像」と呼ばれるもの（広義の「銅で作られた像」ではなく、特定の人物の像を、原則としてその人物とかかわりの深い場所に建設したもの）に興味を持ち、調査研究をおこなっている⁽¹⁾。この調査途中から非常に気になった点のひとつが、銅像の建てられた場所である。調査を始めた当初は、作者（原型制作の彫刻家、鋳造者、台座設計者——多くは建築家）、像主（あらわされた人物）の経歴、発願者、建設の経緯、等のデータを手に入れることに精一杯であって（今でもそれは重要な作業の一つであるが）、銅像の建つ場については、公園・広場といった、人々が多く集まり行き交う公共の場、という漠然としたイメージを持っていた。しかし実際調査を進めると、銅像と呼ばれてきたものが建てられた場所はこれだけには収まらないこと、むしろこれ以外の例の方が数としてはかなり多い可能性があることがすぐに判った。実際に建てられた場を、空間の公共性というベクトルで整理してみると、

- ① 公園・広場、寺社境内
- ② 学校・会社
- ③ 個人宅

と大別できる。②③についてはさらに屋外／屋内に分けられるが、全体として①→③は公→私のベクトルを持ち、空間は開かれたものから閉ざされたものへと変化する。現在所在調査の対象としている670件のうち、調査結果や文献の表記からその場の分類が可能な339件の像を分類すると、①は133件（「駅前」含む）、②は186件（病院含む）、③は20件である⁽³⁾。①は実例数としては抜きん出ているが、不特定多数の人々に向けた場所に、空間の広さに合わせたサイズで建てられており、やはり認知度は圧倒的に高いと言えるだろう。②はその機関に所属する人間に向けて、その機関の人間やOB、OG有志が創設者や恩師を記念して建設するケースが多く、①や②で大多数である像主の死後よりも、退官や帰国、機関の創設記念が契機となる傾向がある。その結果、銅像建設関係者がその機関を離れると、創設者以外は誰の像だかすぐには判らなくなったり、像の存在自体が忘れられたりする例もみられる⁽⁴⁾。③は実例としては少数であるが、邸内（庭や室内）に遺族や子孫によって建てられ、ほとんど外部の目に触れないことから、顕彰目的というより私的な追慕の要素が強いと考えられる⁽⁵⁾。

こうした銅像が建てられたことがその場の景観や空間としての機能にどのような影響を与え、現在に至っているか。これを分析することが今後の大きな目標であるが、このノートでは、これまでの調査結果を元に①②③のそれぞれの場に建てられた銅像の幾つかの類例を挙げ、目標に向けて今後どういった視座が有効となるかを考える手がかりとしたい。まず基本情報と考えている項目について一覧表とし（表1）、次にそれぞれの銅像（なおここで対象とするのは国内及び日本の統治下で1945年までにオリジナルが作られた銅像である）や場の特徴について、戦前と近年の写真や絵

表1 比較表

	大村益次郎像	西郷隆盛像	楠木正成像	大隈重信像 (大礼服)	大隈重信像 (ガウン)	田中長兵衛	横山久太郎	平井六右衛門
建設地(現表記)	千代田区九段下 靖国神社境内	台東区上野公園	千代田区皇居外苑 皇居前広場	新宿区早稲田大学 構内	新宿区早稲田大学 構内	岩手県釜石市釜石 釜山(鈴子公園) →新日本製鐵株式 会社釜石製鐵所構 内	岩手県釜石市釜石 釜山(鈴子公園) →新日本製鐵株式 会社釜石製鐵所構 内	岩手県紫波郡日詰 町 平井邸内
除幕	1894年2月5日	1898年12月	1900年7月10日	1907年10月20日	1919年5月1日	1919年5月1日	1919年5月1日	1918年11月1日
発願	賀茂水穂, 有栖川 宮熾仁, 山田顕義 ほか造立委員	吉井友美, 榊山資 紀ほか	住友吉左衛門	早稲田大学校友一 同	早稲田大学校友一 同	田中釜山株式会社 社員職員その他有 志	田中釜山株式会社 社員職員その他有 志	平井六右衛門(12 代)
原型制作	大熊氏広	高村光雲, 後藤貞 行, 山田鬼斎, 林 善雲	高村光雲, 後藤貞 行	小倉惣次郎	朝倉文夫	長渡南 →大須賀力	長渡南 →大須賀力	朝倉文夫
铸造	東京砲兵工廠, 技 師金子増?	岡崎雪声	岡崎雪声, 杉浦滝 次郎	不明	不明	不明	不明	不明
台座設計	賀茂水穂か	塚本靖	片山東熊	不明	桐山均一	不明	不明	不明
像高	約320cm	約364cm	約435cm	190cm	289cm	不明	不明	等身大 (胸像高さ63cm)
台座高	約870cm (基壇+円柱部)	約360cm	約464cm	(現在75cm)	212cm	不明	不明	130cm(現在の 台座は121cm)
像容	立像。左前方を眺 望。左手は垂下し て双眼鏡を持ち、 右手は腰に当てる。 左足を踏み出す。	立像。左手は腰の 刀に当て、右手は 垂下し右下に連れ た大の縄を束ねて 持つ。右足を踏み 出す。	騎馬像。右手で手 綱を引き、上半身 やや後傾。馬は左 前脚を高く折り曲 げる。	立像。垂下した左 手に帽子を抱え、 右手は杖をつく。 右足をやや前方に 出し直立。	立像。顔は正面を 向き体は左後方に 引く。右手に杖を つく。	立像。左肘を曲げ 垂下した右手にシ ルクハットを持っ て直立。→再建像 は胸像。	立像。垂下した左 手に手袋を持ち、 右ひじを曲げ直立。 →再建像は胸像。	立像。正面を向き 両手垂下。右手に 畳んだ扇子を持つ。
服装	羽織袴	和装着流し	甲冑	大礼服	角帽, ガウン	フロックコート	フロックコート	羽織袴
銘文	嗚呼此故兵部大輔 贈三位大村君之 像也方顔門頭肩軒 目張凛乎如生使人 想其風采君諱永敏 稱益次郎長門藩士 性沈毅有大志夙講 泰西兵法擢為兵学 教授尋參藩政監軍 兵制慶應二年之役 守藩北境連戰皆捷 戊辰中興徵為軍防 軍務局判事時幕府 殘党撫東叡山方命 君獻策討而殲之尋 征奥羽平函館君背 參其惟輕以功賜祿 千五百石陞任兵部 大輔大定陸海軍制 之基礎明治二年在 京師為兇人所狀薨 年四十七 天皇震 悼贈位賜賻後又授 爵榮子孫頃者故旧 相謀造立銅像以表 其偉勲以余知君尤 深記概略若夫平生 事業具載其鄉岡山 墓碑嗚呼像之與碑 君之功名可共不朽	西郷隆盛君之偉功 在人耳目不須復贅 述前年 勅特追贈 正三位 天恩優渥 衆莫不感激故吉井 友美與同志謀鑄銅 像以表追慕之情 朝旨賜金仗費捐資 贊之舉者二萬五千 餘人明治二十六年 起工至三十年而竣 乃建之上野山王台 記事由以伝後	自臣祖先友信開予 別子山銅抗子孫繼 業二季亡兄友忠 深感國恩欲用其銅 鑄造楠木正成像獻 之闕下蒙允末果臣 繼其志董工事及功 竣謹獻 明治三 十年一月 從五位 臣 住友吉左衛門 謹識	明治四十年十月我 早稲田大学創業二 十五年設筵拳賀而 總長大隈伯爵亦齡 七十於是校友員議 捐貨建銅像紀其德 也銘曰戲偉大学維 伯總長聿育英才廿 五霜規模既敷養 既昌如木之培如玉 之藏收穫不爽內實 外交潤我邦國單照 四才吳天曰眷載錫 百祥君子君子享壽 無疆。 鑄銅像建 像于彼高岡匪曰彤 昂忠所敬靡物無彰 朝夕瞻永矢弗忘	なし	釜石釜山田中製鉄 所ハ明治十八年初 田中長兵衛氏ガ工 部省ノ後ヲ承ケ創 業セシ所ニシテ星 霜ヲ閱スルコト茲 ニ三十年事業嚴峻 トシテ日ニ進ム所 長横山久太郎氏創 立ヨリ業務ニ執掌 シ拮据經營功績甚 タ多シ因有志相謀 リ二氏ノ銅像ヲ建 立シ以テ記念トナ ス	(田中像参照)	なし
	明治廿一年六月 内大臣從一位大勲 位 公爵 三条実 美撰併書							

葉書等を見ながら敢えて共通の視座を持たせずに考察を試みた。多くのご意見ご助言をいただければ幸いです。

I 公園・広場・寺社境内の銅像

ここでは「公園」「広場」「寺社境内」にそれぞれ該当する《西郷隆盛像》《楠木正成像》《大村益次郎像》を取り上げる。これらの像はしばしば「東京三大銅像」と呼ばれ、事実その先駆性からも知名度からも、東京に限らず現存する日本の銅像を代表するものと言ってよいだろう。

●東京都台東区恩賜上野公園《西郷隆盛像》

先日《西郷隆盛像》(以下西郷像)を訪れる途中、若い女性に像の場所を尋ねられた。辿りついた像の前では数人が携帯電話のカメラを構えていた(写真1)。

おそらく知名度ではトップの「西郷さんの銅像」は、建設運動の過程でその建設(予定)地が二転三転している。東京市内の公園→上野公園地内→宮城正門外(許可後取り消し)→上野公園(→上野公園内山王台)といった具合である。上野公園は1873年1月の太政官布告⁽⁶⁾によって、それまでの社寺境内が「公園」として制度化された場のひとつであった。当時公園地に銅像を建てるには所轄官庁の許可が必要であり、西郷隆



写真1 《西郷隆盛像》(筆者撮影, 2004年)



写真2 《西郷隆盛像》絵葉書(撮影年不明, 筆者蔵)

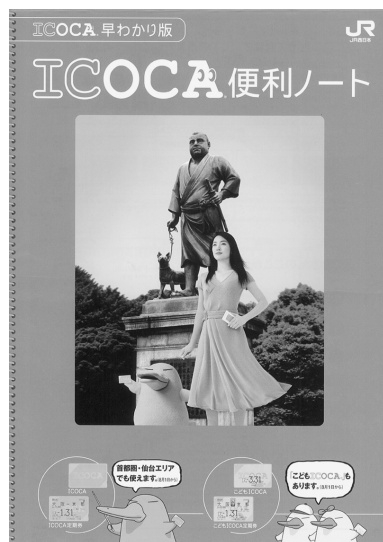


写真3 ICOCA 便利ノート (JR 西日本, 2004年)

盛という人物を明治政府がまさしくどこに位置づけるかが問われたことになるのだが、結局、勸業博覧会が開かれ天皇が行幸したような公園の中心地(現在の国立博物館付近)からは外れ、現在位置の山王台に彰義隊の墓所を背にして建つことになった。小野良平氏は上野公園の成り立ちについて「内務省の所管(のち明治14年には農商務省, 19年には宮内省に移管)とい

う国家を背負った特殊な位置づけのなかで、博覧会の会場として繰り返し使用されるとともに、博物館を中心に数々の文化施設を加え、従来の花見の名所性を保ちながら娯楽性と文化性を併せ持った独自のゾーンを形成していった」(小野 2003:106)とされているが、そこに西郷像が占める意味は、建設経緯を含めて今後慎重に考える必要がある。

一方、西郷像は除幕後に「吾人は国民の景仰に適はず、また其の土地と何等の縁故もなき南州の銅像を上野に立てたるを不倫の行為として難ぜざるを得ざるなり」(中山 1925:105)といった高山樗牛や勝海舟らの論調や鹿児島への移転話、その像容に対する評論家らの批判(全く似ていない、服装に威厳がない、など)もあった。しかし「西郷さん」は、その呼称が示すとおり多くの人々に圧倒的に親しまれ、名所絵葉書(写真2)からJRのパンフレット(写真3:JR西日本の乗降カードが東京地区でも使えるようになったことを示すもの)にいたるまで、上野(=東京の玄関口)の明解なシンボルとして、日常や上京時の待ち合わせ場所として、また災害時や職探しの情報交換や発信の場所として機能してきたといえるだろう。

●千代田区皇居外苑 皇居前広場《楠木正成像(楠公像)》

古い絵葉書(写真4)に写された頃に比べると、現在の像(写真5)の周囲は樹木がこんもりとし、像よりも高い建物(第一生命ビル)が視界に入って、像の背景の空が少なくなり、像ののびやかさは抑えられ、像が支配する空間も低く感じられる。また像の表面全体に緑青がふき、色や輪郭のインパクトも変化している。大分印象が違うものだと思いますながら先日この像を眺めていると、バスツアーの一行がやってきた。耳をそばだててガイドの解説を聞いてみると、「こちらは裏ですが、お顔は表からは見えませんので表に回る前によくご覧になってください」と言う。銘板があるからそちら(像から見て左側)が表、だそうである。真偽のほどは判らないが、絵葉書などの構図は大多数が「裏側」、つまり像の右前方からの視点を取り、そこに登場する人々も同じ位置から像を眺めている(名所絵としてのステレオタイプな構図の摺り込みでもあるか



写真4 《楠木正成像》絵葉書（撮影年不明，筆者蔵）



写真5 《楠木正成像》（筆者撮影，2004年）

もしれないが、やはりこの視点での構図が一番像の造形バランスがとれている。

とすると像を見上げる多くの人々は、皇居に背を向けることになる。皇居前広場を含む皇居外苑は、1889年の整備開始から1945年までは天皇の奉祝などの国家イベント場として存在し（当時は皇居前広場でなく宮城前広場）、1946年にはメーデー会場として広場の利用が許可され、1952年にいわゆる血のメーデーが起きる。その中で楠木像の周囲だけは、忠臣としての楠木像が皇居へ馳せ参じるような方向性を持つ一方で、像を見る人々の視点は皇居と反対になり、あくまで中心は楠木像となる。皇居前という非常にシンボリックな場所に建ちながらその空間全体の中心に位置するわけではなく、意外にも楠木像の周辺は自己完結しているようにも見える。

像がその場の主役やその場に集まる人々に対してどういう向きをとるか（次に挙げる《大村益次郎像》の場合は、自らが戦いを指揮した上野の山の方角を向いているという理由で、神社の本殿に背を向け、神社に向かう人々と相対している⁽⁹⁾）、そしてどの向きで受容されているか、も興味深い問題である。

●千代田区靖国神社境内《大村益次郎像》

《大村益次郎像》（以下大村像）は、明治に入って輸入された西洋の鑄造法による国内初の銅像として、まず特筆される像である⁽¹⁰⁾。

この大村像も初めから靖国神社に建設が決まっていた訳ではなく、1882年に始まる銅像建設運動の中で、一時は芝公園（港区）への設置案も持ち上がり（『東京日日新聞』1885年12月1日）、1886年になって靖国神社への設置願いが内務省・陸軍省・海軍省の指令という形を得て許可されたという経緯がある。

靖国神社に向かうと、大鳥居を巨大なフレームとして、その正中線上に大村像が目に入ってくる。

像は参拝者側に対し真正面ではなく少し体を左に開いて直立している（上野の戦いを見守っているのだともいう）。鳥居をくぐって近づいていくと、大村像の台座の高さ（約870cm）に引き寄せられるように視線が上昇する。非常に高い台座だが、現在の参道は関東大震災後に瓦礫を埋め立てたため1893年の竣工時より地盤面が35cmほど高くなっており、その分大村像の台座（基礎の大石部分）は一段分地中に埋もれて低くなっている⁽¹¹⁾。外観の変化はそれに加え、大鳥居前の「引き」が短くなったこと（鳥居からの正中線が靖国通りに合流する前に植え込みや建物によって視界が遮られてしまう）（写真6、写真7）、周囲の樹木の生長、金属回収によって台座周りの鉄柵と大砲がなくなったことが挙げられる（写真8、写真9）。大砲があった時は、人々が大砲をベンチ代わりに腰掛けて像を眺めたり何かを食べたりといった光景が見られる。西郷、楠木に比べて像主の知名度が今ひとつであること、かつて持ち合わせた祝祭空間としての機能を現在ほぼ失った場所であることによるのだろうか、大村像についての解説を読み終わった人々は、900cm近い台座の上の像をちらりと見やっ（実際見上げても細部は見えない）ほぼ素通りしていく。筆者の知る限りでは毎年夏に開催される「みたま祭り」で、大村像を中心として盆踊りの櫓が組まれ、大村益次郎その人についておそらくほとんど知らない人々の中心に立って光を浴びている。

ところでこうした銅像について、建設後間もない同時代における評価はどのようなものだったろうか。像



写真6 靖国神社絵葉書（撮影年不明，筆者蔵）
※ほぼ中央，大鳥居の中に見えるのが《大村益次郎像》



写真7 靖国神社 遠景（筆者撮影，2004年）
※現在では写真6と同構図での撮影は困難。

そのものの造形的な批評はここでは措くとして，像と場との関連について述べているものを列举してみよう。

まず例に挙げた像については，

「靖国神社の大村氏の銅像を見よ，神社の古式にして奥ゆかしきに似ず，銅像の突兀として没風流なる，毫も光景の調和なきに非ずや，又上野公園の西郷氏の銅像を見よ，卒然として之を觀れば山間に強盜に会いたる感あり，此時何の美觀あらん，何の風致あらんや，さらに転じて宮城前の楠公の銅像を見よ，四圍の光景の壮大にして雄偉なるを望む時辺隅に建設されたる銅像を見れば，玩弄物の遺棄せられたるが如し，其の他各所の銅像が周囲の光景と調和せざるは皆同じ。」（東京報知新聞 1906年 11月 20日）

次に，「記念像」という表現を用いた一般論として「記念像の最も最初の條件（従つて根本条件とも見られる）は肖像に非ず，台座に非ず，実に其の位置であり，周囲である」（黒田 1916：64）

また，彫刻家の荻原守衛（碌山）が東京市内の銅像を論じたものとして，

「銅像建設の位置が当を得て居る否やが第一の問題」で，「銅像の芸術的価値——技術の巧拙，人格の体现——が充分なりや否やは第二の問題である」（荻原 1908：37）

とまで言い切った例など，像の建てられた場の選択について，その重要性が力説されており，背景には当時建てられていた像と場との違和感，納得のいかなさ（純粹に造型的に，あるいは人物の業績との関連性において）を感じることができようか。けれどもこうした思惑を超えて，建設側の送り出した「公の場」に建つ「偉人」たちは，本来その場と直接のつながりを持っていなかったのにもかかわらず，あるいは不釣り合いであったのにもかかわらず，不特定多数の人々が集まる場所に建って空間の中にその存在を示し続けたがために，人々の視覚イメージの中にその場所とその銅像とが離れ難く形成され，また絵葉書などのメディアでそれが補強・増幅されて，今日に至っていると考えられる。



写真8 《大村益次郎像》絵葉書（撮影年不明，筆者蔵）



写真9 《大村益次郎像》（筆者撮影，2004年）

II 学校・会社の銅像

●東京都新宿区早稲田大学構内《大隈重信像》

大隈講堂向かい、正門を入れて直進し少し左に折れた場所に位置する。大隈講堂入り口とほぼ直線上にあり像は講堂を向いているが、初めて訪れた者には少々分かりにくい場所で、周りの空間もさほど広くなく、木々に近くまで囲まれてひっそり立っている風情である。学内に入らなくても大隈講堂が大学のシンボルとして目に入るのに対し、銅像はあくまで内部に立ち入



写真10 《大隈重信像》(2004年)



写真11 《大隈重信像》(『偉人の俤』より)

らなければ見ることができない。

現在は角帽やガウンを身に着けた大隈像が知られているが(写真10)、この場所に当初建っていたのは、同じ《大隈重信像》(以下大隈像)でも大礼服姿の別の像(小倉惣次郎作)(写真11)であった。大礼服では私学の場にふさわしくないとして、1932年に現在の像に置き換えられ、元の大礼服姿の像は大隈講堂内に移設された。早稲田大学の学生に尋ねてみると、大隈講堂内の大隈像は学内でもその存在をほとんど知られていないようである。大隈像はこの他に衣冠束帯姿の像(朝倉文夫作・大正天皇即位式の折の姿)も、1916年に東京都港区芝公園に建てられており(戦時供出され、大隈像の建っていた場所は現在では芝公園野球場のほぼ中央にあたる)、同じ像主で三種類の服装の像が建てられたことになる。なお1988年に大隈の出身地佐賀で大隈像の(複製像による)建設計画が持ち上がった時、選ばれたのは大礼服姿の像であった。場と衣裳との関係を考える興味深い例である。

●岩手県釜石市釜石鉱山(鈴子公園)→新日本製鐵株式会社釜石製鐵所構内《田中長兵衛・横山久太郎像》

当初は公園に建てられ、①に分類される像であった。田中長兵衛(1834—1901)は釜石鉱山田中製鐵所(現・新日本製鐵釜石製鐵所)の創設者で初代社長。横山久太郎(1856—1922)は田中の女婿で製鐵所創設者の一人。初代所長をつとめた。二人の像は一对のものとして、釜石駅北西の鈴子公園(1919年開園)に建てられた。おそらく銅像除幕と開園は同時だったのではないかと。田中は没後、横山は存命中の銅像建設(寿像)であった。この公園には桜の木々が植えられ、運動場やクラブも備えられていて、製鐵所の所員はここで懇親会などを行ったという。両像は台座だけでなく巨大な石の階段や橋状のステージの上へ、中央の灯火台のようなものを挟んでシンメトリーに設置され、背後には鉱山の山並みが広がっていた(写真12)。向かって左が田中、右が横山の像である。この時期、この公園、さらにはこの町全体が製鐵所によって維持されているといっても過言ではない状況のもとで、二像は威容を放っていた。ところが戦時中の金属回収令によって両

像とも供出され、戦後、1950年に別の彫刻家の原型によって再建されたとき、像は会社の構内に胸像として設置されることになる(写真13)。現在は鈴子公園の壮大なステージも失われ、背景の山の形も街自体の景観も開園当時とは大きく変化している(写真14)。

再建された両像は、現在、製鉄所事務所の建物入り口向かって左に位置する。構内へ入る門の外から中をのぞくと、かろうじて存在が判る程度だが、許可を得て構内へ入れば、誰もが近づくことができる。おそらく公園にあった像は高い台座やステージの下からはるかに仰ぎ見るものであったのが、現在の像では顔の細部まで観察できるほどであり、像主の存在が人間的で近いものを感じられる。一方で、事務所を訪れる者の視界には必ずこの像が入っているはずにもかかわらず、先に述べたように、当初の像の建設に関わった人物がもはやおらず、鈴子公園も存在せず、釜石製鉄所の街への影響力も減少した現在、一目で誰の像か、何をした人物なのか判る来訪者はほとんどいないであろう。またそこで像の間におかれた説明板を読む人間はどのくらいいるのだろうか。場と人々への影響力とが

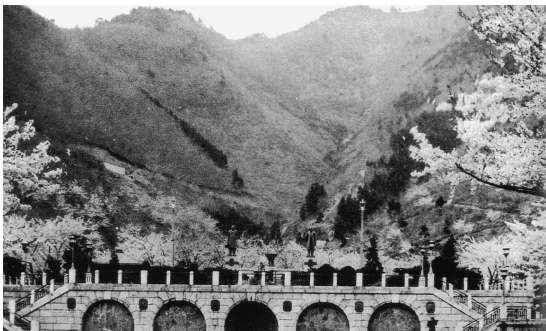


写真12 鈴子公園と《田中長兵衛・横山久太郎像》
(新日本製鐵釜石製鉄所『鉄と共に百年』1986年)



写真13 再建された《田中長兵衛・横山久太郎像》(筆者撮影、1999年)



写真14 鈴子公園の跡地(筆者撮影、1999年)

時間と共に変化したことで、ある程度人目に触れながらも存在感を弱めた像の例である。

III 個人宅の銅像

●岩手県紫波郡日詰町《平井六右衛門像》

像主平井六右衛門は伊勢屋六右衛門、通称「平六」の第10代当主。像は孫である12代六右衛門が作らせたもので、邸内の中庭北東の角に自然石の石組みで台座を作り、像を西向きに設置した(北東、つまり丑寅—鬼門の方角であることは興味深い、この方角を選んだ根拠は不明である)。この像も戦時中(おそらく1944年)に金属回収令によって供出されたが、その際13代六衛門の指示で、銅像の胸から上の部分だけは切り取って、蔵に隠していた(金属として銅像を供出する際に、供出する側が像を切断し部分的に残しておく(おけた)という例を知る上でも興味深いエピソードである)。のち10代六右衛門の没後100年にあたる1992年に新たに台座を作り、胸像として現当主(14代)自邸の常居の間に置かれることになった。現在中庭には、台座となった石組みが残されている(写真15)。

平井家の中庭は煉瓦塀で囲われており、外部から完全に遮断されたプライベートな空間ではあるが、同家は地元の有力者であって来客も多く、特に銅像竣工直後に岩手出身の原敬が平井家を訪れていることを考えると、ある程度外部へのアピールを意識しつつ建てられたのではないかと。玄関前の外庭と違って中庭は来客誰もが目にする場所ではないが、特に親密な客、重要な客には開放する場であり、像を見るにふさわしい、あるいはぜひ見て欲しい相手には中庭を案内したので



写真15 《平井六右衛門像》台座（筆者撮影,1999年）

はないだろうか。これに対し胸像となった平井像は、先に述べたように当主の居室におかれ（しかも普段この邸宅は使用されていない）、ほとんど他人の目に触れることなく、ますます私的な存在となっている。

今後の課題

今回は銅像の建てられた場をひとまず「公」のベクトルによって分類した。各像についてはその特徴と思われる部分を書き連ねた結果、事例紹介に終わってしまい「場」の問題として首尾一貫した比較ができなかったし、それぞれの特徴が十分に見えてこなかった。また、多少意識しつつもほとんど触れられなかった視座として、建設地の広さと像の大きさとの関係、像の形態（立像、坐像、椅像、騎馬像、また全身像か胸像か）や衣装（和服／洋服、私服／儀礼服）と場との関係、眺望、周囲の他施設との関連性があり、これらを今後どう分析に活かせるかも課題である。さらに、戦時中の金属供出や戦後の撤去後における場の再編も興味深い問題である。

また、敢えて視覚面の印象を強調したいと思ったが、空間の中で造形と対峙し言語化する作業から遠ざかっていたことを痛感した。「見る」「読み取る」ことの訓練も大きな課題とした。

注

- (1) 「忠犬ハチ公」など、その「美德」によって人格化された動物や、歴史上・神話上の人物を含む。
- (2) また、所属する屋外彫刻調査保存研究会においては、ポーラ美術振興財団の助成により「戦前の文献にもとづく作品台帳作成と所在調査（全国調査）」をおこない、現在報告書を作成中である。

- (3) 注(2)において基本文献としている銅像写真集『偉人の倂』（二六新報社・第1版・1928年、第2版・1929年）に基づく。数字は2004年10月現在。
- (4) 木下直之編『博士の肖像——人はなぜ肖像を残すのか——』（東京大学総合研究博物館、1998年）
- (5) 1921年に発表された浜田広助の童話『大将の銅像』では、陸軍大将の遺族が屋敷の庭と故郷の公園に建てるために、彫刻家に銅像を作らせる。屋敷の庭という私的な空間と、像主ゆかりの公的な空間の両方に銅像を建てる、という例は実際にも大隈重信像などでみられる。
- (6) 「三府を始、人民輻輳の地にして古来の勝区名人の旧跡等、是迄群集遊観の場所（東京に於ては金亀山浅草寺、東叡山寛永寺境内の類、京都に於ては八坂社清水の境内嵐山の類、総て社寺境内除地或は公有地の類）従前高外除地に属せる分は、永く万人借衆の地とし、公園と可被相定に付、府県に於て右地所を択ひ、其景況巨細取調因相添、大蔵省へ伺出事」（太政官布告第16号）。
- (7) 関東大震災では、西郷像に尋ね人の貼り紙が多数貼られたり、像の足下で夜を明かす人々がいたという。
- (8) 時折「〇〇週間」などの襷をかけているのを見かける。
- (9) 屋外に建つ銅像は、その光線によって影がちにならないために南向きに建てるのが良いとも言われるが、方位の分析はほとんど未着手である。
- (10) 時期の早さだけでいえば、石川県金沢市の兼六公園内に位置する《日本武尊尊像（明治記念碑之標）》（1880年）が日本初の「銅像」とされる。従来の鑄造法によって作られ、地元では「金仏さん」と呼ばれていた。
- (11) 「靖国神社蔵金属製文化財の文化財保存科学的調査」『屋外彫刻調査保存研究会会報』創刊号（1999年7月）。
- (12) 主人の起居する間。
- (13) 14代平井六右衛門（現当主）平井冽氏のご教示による。

引用文献

- 黒田鵬心
1916「東京市の記念像に就いて」（『美術新報』16-2）東京：美術新報社。
- 中山啓
1925「東京の銅像の批評（1）」（『アトリエ』2-9）東京：アトリエ社。
- 荻原守衛
1909「東京市内の銅像を論ず」（『早稲田文学』48：37）
- 小野良平
2003『公園の誕生』東京：吉川弘文館。
〔2004年10月15日受理、11月10日審査終了〕